

# 浄土

## 三月號

墓 の 話 吉屋信子

梅の咲く頃 吉田絃二郎

説きがたきもの 眞野正順

生きてる佛教藝術 藤田寛雅

## 空 氣 の 味

戦争の終つた頃のことである。潜水艦に乗つていた或る人が、復員してきていろいろの話の末に、こう語つた——潜水艦は晝間は敵に発見される危険があるので、水の中に潜つてゐるが、時間が長くなると空気が濁つてきて、段々と呼吸が苦しくなる。しまいには身體中の血がこわばるような何とも言えない苦しさになる。そんな時ふと上に浮び出て、薄暗くなつた海面で、思う存分吸う空気のうまさというものは、全く何に譬えようもない。

こんなうまいものがあつたのかと思う。ほんとうに空気ほど有難いものはないと感謝するのです——

私どもは日常、空気を吸つて生きてゐることを殆んど氣づかないまして空気のお蔭で生きてゐるのだなどと思ふことはない。空気はただの物理的な存在で、人間はそのうちの酸素を吸い炭酸瓦斯を吐き出して生きてゐる。これは何の不思議もない生理現象である。こう考えるのが常識であり、それが合理的であるといわれる。

人生のこと萬事がそうである。私どもは日々夜々に佛の慈光に包まれて暮してゐるのであるが、順調なときにはそんなことなど氣づかない。しかし一度いつもの平衡状態が破れて人生の危機に迫り込まれると、物の見方は一變する。人間のはかない知性が唯一の頼りとしていた合理性の世界では、お蔭とか有難いとかいう受け取り方はなくて、すべてが當り前であつたのだが、この世界が破れると、何もかも佛のお導きとして有難く嬉しく頂けるようになる。ここに宗教の門が開けて、ひとは常識の世界から信仰の世界にはいるのである。

(佐藤賢順)

## 目 次

|                |          |
|----------------|----------|
| 説きがたきもの……………   | 眞野正順(14) |
| 生きている佛教藝術…………… | 藤田寛雅(6)  |
| 春・野(詩)……………    | 鳥居良禪(3)  |
| 春近し(句)……………    | 佐藤治子(7)  |
| 墓 の 話……………     | 吉屋信子(4)  |
| 梅の咲くころ……………    | 吉田絃二郎(1) |
| 彼岸つれづれ……………    | 竹中信常(9)  |
| 生きることの教育……………  | 野口 彰(12) |
| 正しい生活……………     | 吉原元明(13) |
| 煩惱と細菌……………     | 松濤誠康(11) |
| 芝園だより……………     |          |



# 梅の咲くころ

吉田 絃二郎

松本幸四郎丈が歿くなつた。梨園にとつて寂しいことである。

わたくしは年々歳の暮になれば十軒店に出かけて行つて羽子板を買つて來たが、たいていはいつの間にか客人たちに上げてしまつた。そして最後には中車の光秀、先代福助の千早姫、左團次の毛拔と丸橋忠彌、幸四郎の暫の五枚だけが残つてゐたが中車の光秀はたしかオランダに歸るハニーといふ娘さんにはなむすめ餞はなむすめしたと思ふ。それで手許には四枚だけ残つてゐるが、今度幸四郎丈が亡くなつたので羽子板の主あまたちは、みんな世を去つてしまつたことになつた。昨日今日わたくしは花やかな歌舞伎役者の羽子板に對坐して、一層人生如露如電の感を深くしてゐる。

中車とは歌舞伎座の樂屋で最後に逢つた時「わたしは子供の時からよほど芝居が好きであつたと見え、三歳の

ころ母にいだかれて道頓堀を通りましたが、芝居の繪看板を見て、ぜひ小屋の中を見たいといつて母を困らせたさうでございます。初舞台は六ツ、伏見あたりの小屋でした」と語つてゐたのを特にはつきりと記憶している。

幸四郎も戦時中、歌舞伎座の樂屋で「そのころわたくしがいたゞくお給金が二十圓でした。それでも樂屋入りには男衆も連れなければなりません。生活の苦しさといつたらありません。或る時などは、樂屋入りをするのに若旦那が召していらつしやるお羽織がございませんよと男衆が先づ泣き出すといふさわぎでございましたよ」と話してゐた。

中車、幸四郎ともに若いころは並々ならぬ苦勞を積んで來た人たちであつた。それゆゑかかつて一度も役不足などの不平をこぼしたこともなかつた。まさかと思ふ端役をもおとなしく引き受けて、諸々として演じてゐた態

度には頭の下るものがあつた。いつたいに家柄がよくてさしたる苦勞もなく芝居の大立物になつたやうな役者には、わがまゝな人が多いが、幸四郎、中車は家柄の背景もなくあれほどの地位を築き上げた人だけに、謙遜自製の美の宗教界の大徳を聯想させるものがあつた。宗教も藝道もたどりつくところは一つであらう。

或る日劇壇の消息に通じた人が訪ねて来て、某俳優がこのごろ病みがちなところからひどく死ぬことを恐れてゐるといふ話を聞いた。世に時めき、絢爛な歌舞伎の雰圍氣につゝまれてゐる人として無理からぬことであり、同情の念を禁じ得ない。どんなに悟り得たつもりでもいざ死ぬとなれば悲しみなきを得ない。芭蕉のやうな人でも死に對する恐怖には打ち克つことは容易でなかつたらしい。その恐怖に打ち克つ手段としてかれは無一物の境涯を理想としてゐた。近江の膳所の弟子達がかれのために安住の棲家を営まうとした時、芭蕉は雨露をしのぐだけのものでたくさんだ。家あるがゆゑにわが心に執着を發せしむるやうな物であつたらお斷りをする。所詮この世は風前の蛛蜘蛛の巢のもろきが如しといふ意味の手紙を

弟子達にあたへてゐる。

考へて見ると一冊の本にも執着はある。床の間の一個の壺にも執着はある。

某俳優の死を恐るゝ話を聞いた翌日、わたくしは黄昏の武藏野を歩いてゐた。そしてたまたま靜かな夕暗につつまれて行く白梅の林を觀た刹那、わたくしは梅に對する執着を感じてゐることに氣付いて慄然たるものがあつた。わたくしはいつまでも生きてゐて來る春ごとの梅を觀たいと思つてゐたのであつた。

人間はたとひ無一物の境涯に達し得たりと思ふ刹那にも、さらに無限の執着を感じてゐる。生きることも悲しく、死ぬることも悲しい。

梅といへば萬葉には梅の歌がたくさんある。

梅の花しだり柳に折りまじへ神に手向けば君

に逢はむかも

梅の花吾は散らさじおもによしなら青丹吉平城なる人の來つ

つ見るがね

もゝしきの大宮人はいとまあれや梅をかざし

てこゝにつどへる

雪見れば未だ冬なりしかすがに春霞立ち梅は  
散りつゝ

うつたへに鳥は喫まねど標繩延へて守らまく  
欲しき梅の花かも

淡雪に暗香疎影の静けさをめでて梅に纏綿たる衷情を  
訴へた平城人たちの心がらがうかがはれる。梅が咲けば  
雪の中にも春の來たことを知り、梅の下に集うて酒を掬  
み、からうたを咏んだであらう當時の風習が偲ばれる。

麥畑のかなたに煙のやうにたゞようた一抹の梅の花は  
今の世にはかへりみる人もないやうに見らるゝが、尙ほ

## 春

軟風は雨をもたらし

雨は瓦の色を新しくした

敷石のあいだに

何か芽ぶくものがある

春

この寺院は海の匂がした

人をして低徊去る能はざらしむるものがある。じつと梅  
の花を眺めてゐると萬葉時代の人々のおほどかな生活の  
姿が映つて來るやうである。

たまゆらに夕暮れの畑の片隅に見出し得た梅ではある  
が、立ち留まつて眺めてゐると、萬葉時代の敬虔な佛師  
たちが、迥かなる淨土を想ひつゝ一刀三禮してあのすば  
らしい佛さまを刻んでゐる姿も映つて來る。悟り得たつ  
もりでゐるが、靜かに咲いてゐる梅の花を観ると、死ぬ  
といふことは寂しい。

## 野

雨があがると

野と庭の間を一條の水が流れ

そのあたりに一めん連翹の花が光つた

藪鶯の聲は遠くちかく

この森閑たる庫裡をめぐつた



## 墓の　　話

吉　屋　信　子

人はいつかは厭でも墓へ行く、でもお墓といふものは子供の頃は無氣味で厭だと思つた。

ある時、マニラへ行つたら南方らしい太陽の下に、廣い墓地には白い大理石のさまざまの彫刻がそれづくに、墓に眠る主を象徴して立つてゐた。それは南方の明るさの中に石が眞白に反射して、周囲の青い樹々に縁どられ墓石をかこむ花壇に南國の花が咲き溢れ、實に極樂淨土の趣きだつた。少しも墓地らしい陰氣くさもなく、死者への感傷もなく、なんだか明るい公園のような氣がした。

同じ南方でも、ジャバのスラバヤその他の郊外にある日本人墓地の片隅に、誰れ一人詣ずる者もない小さな石の面に、和歌山縣人何某女享年十九歳などと書いてある

墓石が淋しくスコールを浴びてゐるのを見る時はほんとうに暗然とさせられた。その石の下に眠る十九の娘は、南方へ賣春婦として賣られて來た娘子軍の骨を埋めたものだと聞いた。

上海の外人墓地にもたくさん外人のその土地に骨を埋めた人達の碑が立つてゐて、碑の面には叙情的な詩のような言葉が彫られ、その人の在りし日を説明してゐる。

かつて横光利一氏も上海に遊んだ折、やはりその墓碑の文字に心を打たれたとみえ、その一二を丹念に寫しとられ、旅行記に發表されてゐた。その横光氏もすでに墓の下に行かれてしまつた。だからうつかり墓のことなど書くものではないかも知れない、ところが、この隨筆を

書く動機は墓の問題に起きたのである。

實は私は東京の家が戦災を蒙つてから鎌倉に住居を定め、今のところ永住の心をきめてゐる。

場所は國寶の美男で有名な長谷大佛の裏にあたり、座敷から大佛様のおほらかなお脊中を松の枝越しに朝夕見る處である。それに心惹かれて、私はこゝに住みつきたいと思つてゐる。

そこは谷戸（鎌倉に多い山のはさま）で、どこへ出るにも山の間の一筋の道を辿るのである。その道の片側の珊瑚樹の垣根の一郭の中が、大佛様の墓地である。

お寺の御住職の父祖の轉法輪家の墓がその垣の奥の一段高い山際（まは）にある。實にいゝ場所で、春はまはりの山櫻の葩はなびらが墓石にそゝぎ、夏は青葉若葉が生ひ茂つて墓を覆ひ、秋は山紅葉にかこまれて、千代紙を切つたような散紅葉が墓石の面を絶えずかすめて落ちるのである。冬は山の冬椿の赤い花が落ちて時ならぬ供華に代るのである。

私はある時この墓地に入り、しみぐとまはりを見廻して、こゝを自分の墓地にきめようと思つた。

私の父祖の墓は長州の萩や、東京の多摩墓地にもある

が、私はそこは失禮して、ぜひ自分のこれから長く住みつかうといふ家の傍で、そして朝夕大佛様の仄見えるこの場所にこそ、わが永遠の憩の地を定めたいと思つた。そう思つたら大變心が落着いて墓のことを考へるのもまた愉たのしいことになつた。もつとも今から墓へ入る氣はなく、もう少し生きて、そして幸福にあまり思ひ残すことなくなつてからがいゝ。

今年の自分の誕生日に、外國の習慣のようにその日に遺言狀を書くことを思ひ出し、その一つとして、大佛様の御夫妻に墓地の話を楽しひながらしたら、

「墓地をきめることは少しも縁起が悪くはないのよ、きめておいてかへつて、長生するものよ」

大佛様の夫人が言はれた、そして更に曰く、  
「佛教の雜誌に隨筆を書いて下されば、うちの近くの墓地を分けて上げてほしいわ」

なるほどそんなに廣からぬ墓地を分けて戴くことは容易ならぬ好意であらう。但し、たゞで巻き上げる氣はないけれども——ともかく、あんないゝ轉法輪家の近くの墓地の少しを分配されることは有難い次第で將來の憂ひなく生きてゐられるわけである。

# 生きてゐる佛教藝術

藤 田 寛 雅

總選舉の開票をめぐつての昂奮も、山を越した一月廿六日の朝、全國の人たちを驚かせたものは、法隆寺金堂の火災ニュースだつた。世界で最も古い木造建築物、ことに印度アチャンターの壁畫との相似、更にはるかにギリシャ藝術の流れをも汲んでいるといわれる金堂内壁の壁畫、千二百年の永い年月を経てきた世界にはこる佛教藝術、東洋繪畫の絶頂を示すこの壁畫が、無残にも失われてしまつたことは、戦後日本の、文化國家を口にする日本の最大の悲劇である。アメリカのウォーナー博士をはじめ心ある人たちの努力で戦火をさへ免れてきたこの光榮ある文化財が一瞬のうちに日本人自らの不注意によつて失われたことは世界の悲劇でさえある。文化施策の貧困さ、國寶保存に對する無理解、放任、そおした戦後日本の、文化にたいする心なき姿に、人々は今更のように氣付いた。

「今の日本には文化財を協力して守るとゆう氣持が少いように思う」と言われたウォーナー博士の言葉を、いまさら乍ら私たちは深く反省したい。戦後の日本は何もかも新しくなろうと、努力してきた。そのことは決して誤りではないが、新しくなるとゆうことが、眞にどのようなことであるかを深くは考えていない。デパートの飾窓の陳列のように、ただ日に日に移りゆくものを追ひ求める「新しがり」そして眞に日本の歴史が、その文化的活動の深奥から生み出

し育てあげてきたものをも、古さと名のつくそれだけで、破りすてふりすてゝ顧みようとしない輕薄さに、私たちは思想の上でも、生活の中でもふりかえつてみれば氣付くであらう。

明治のはじめ、歐化の名の下にただ皮相な新しがりやに走ろうとした日本に、傳統のもつ眞の生命、歴史が生んだ文化の尊さを教えてくれたのは、アメリカのフェノロサであり、伊太利のキヨソネといった人たちであつた。捨てるべきものはいさぎよくふり捨てて脱皮するがよい。しかし保つべきものは、飽くまでも守りつづけてゆく心のたしかさを失ひたくない。こおした想いの中で、私は昨暮、上野の博物館ではじめて公開された「截金」の秘技のことを想ひ返し美しい多くの佛教美術を生み出したこの技法が今なほ生きていることを、こゝに紹介してみよう。

佛教が日本の文化の進みの上にどんなに大きな役割をもつてきているかは、法隆寺を考えてもよく分ることである。今度焼けた金堂に安置されている木彫の四天王像は、「截金」彩色を施した最も古い作品である。この「截金」とゆうのは、あの薄い金箔、銀箔を、細い線、あるいは三角とか、四角、菱形などにこまかく切つて糊、にかわで貼りつけて種々の文様を施す方法をゆうので、佛像や佛畫の

彩色法として古く發達してきたものなのである。殊に一寸としても吹き散るような薄い箔を、こまかく切つて、しかも筆で描いたのと異らぬ程の自由なそして繊細複雑な文様を描き——いや、貼り出してゆくとゆうことは、驚くべき緻密な技術である。

その發祥はシナ六朝の頃といわれるがとくに我國で非常な發達をとげ、多くの優れた作品を遺すに至つたのも、一面手先のこまかい

技術に巧みな日本人に適したためでもある。正倉院の新羅琴の文様、

東大寺戒壇院の四天王像など奈良時代のものから、殊に淨土信仰が盛になつた藤原時代には、截金彩色の極盛期を示し、種類も複雑多様となり斬新味のゆたかなものが生み出された。有名な高野山の聖衆來迎圖の中尊阿彌陀の金色端嚴の姿は、この截金で描き出されている。しかしかゝる繊細豊麗な截金の美も、佛教藝術とその運命を共にし、今日では殆ど絶えてしまつたといわれている。

ところがこの技法が、いまもなお佛教の中に保ちつづけられ、そして多くの信仰者の禮拜のための佛畫を描きつづけてきているのである。東西本願寺の永田清香・齋田梅亭の兩氏がその人である。

初冬の目差しが明るく、大きな窓をとおしてさしこむしづかな博

## 春 近 し

種店に誰も居らずや春ぞたつ

ねこの子の何をねらふや下萌ゆる

傷み居し古雛なほし元の座に(雛祭)

よき雛や四十年の齡かな

——佐藤治子——

物館の一室には、聯合國關係の家族連れの人たちの服色が、われわれの黒つばい背廣の中に美しい彩りを示していた。卅人ほどのわづかなしかし佛教美術の秘技を知ろうとする熱心な人たちに圍まれて永田・齋田兩氏は、永い歴史の京都で、佛教殿堂の中に保ちつづけた秘技の生きた姿をいましづかに我々の目前にひらいてくれた。

よくおこつた炭火をすつかり灰で蔽つてある火鉢、三、四枚重ねた金箔を竹のピンセットで挟みながら、あぶつてゆく。灰を蔽つてはあるが目に見えぬ火氣にさえ、フワリとあほられるように、動く金箔は、裏表と何回かしづかに返されるたびに、キラと光つてみえる。

「こうしますと箔が強くなりますので、」と、適度にあぶつた箔をしづかに押し、のぼし乍ら永田さんは面長な整つた顔をあげて、京都訛りの言葉で私たちの質問に答えてくれる。鹿皮を貼つた小さい板の上に、その箔はおかれる。細長い竹へら様のナイフをしづかに箔にあてて、スツスツと動かしたとおもうと、永田さんはスツと糸の様な一筋の切られた金箔をもちあげてみせてくれた。

「こおやつてほんとに髪の毛ほどの細さにまで切ることも出来ます。ただどんなに研いであつても金属のナイフや剃刀では、切るときのはんの僅かな摩擦にも吸ひつけられて箔がくづれてしまつ

て駄目なのです」

と、一尺たらずの竹へらをしなわせてみせた。

「竹のナイフですね。之は信夫竹、とわたしは言つてますがそれを削つて刃をつけるわけです、えゝ、自分でこれも作りますおみせしませうか」

竹の一片を鋭い切り出しで押える様にしながら片膝の上で、竹片を手もとに引いては削てゆく、スルスルスルと竹はうすく削られて鋭い刃が一樣についてゆく。

こおした竹の小刀で切られた金箔の糸筋が小箱の中に、いく筋か光つている。

それでは今度は描いてみませう。

と、阿彌陀佛の輪廓を描いたワク張りの下繪に向つた。筆の穂先を小箱の一本の箔につけたとおもうと、糸箔は吸ひつけられる。糸箔を穂先に吸ひつけた筆を左手に、永田さんは上體を伸して下繪にズーッとのしかゝる様な姿勢、見ている私たちは、左手の筆にあやつられて垂れている糸箔が、一寸とした空氣にもスツととびそうで、息をつめるように黙つた。膠汁をつけた一本の筆を右手にして、丁度二本の筆先のあいだに一筋の糸を宙吊りしたような形になつたとおもうと、右手の筆が下繪の上を走つてゆく。それについて左手の筆が宙を追つてゆく。宙吊りの糸がその間を吸ひよせられるように畫面に降りてゆく、スルスル——と一本の金線が描かれる。圍りに人のいるのも忘れる。明るいしづかなこの室の空間を金の糸箔が動いてゆく、阿彌陀さまの衣文が光り乍ら現はれてくる。

私はふと芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を想い出した。極樂の蓮池の玉のような白蓮の間から、はるか下の地獄へと降ろされた糸、ひつ

そりとした暗の中をとおつて、遠い天上から一寸ち細く光りながらするすると降りてくる銀色の蜘蛛の糸を。

私はホツと幻想からさめたように、また永田さんの手さきをみる。筆先が微妙に、小さきみに動いたと想うと、糸箔はこまかなひだを折りながら、斜にくねり、圓く光つて、自由な曲線文様を描き出してゆく。箔がおりにてくるのを筆が追ふのか、筆の描く糸筋に箔がついてゆくのか、細い金と、白い筆の穂先のとがりと、私は微妙な錯覚が起るような氣がした。

「それは筆で膠をつけ乍ら、その上に箔をおろしてゆくわけですよ……。不即不離ですね」

永田さんは笑いながら、その筆を私に見せた。それは何の變哲もない、市販の普通の太筆だつた。綠色に軸に鳩居堂と彫つてある文字が、何か違つたような感じで目に映つたほど、私はこの生きた截金技法の美に魅せられた。そおいえば、金箔の糸は光の工合でしづかに息づいているようにさえ見えた。

千年前の佛教美術の世界に、咲いた截金彩色、その後の永い歴史の轉變の中を通つて世に知られようともしせず守り保ちつづけてきた何代かの人たち、このうすい一筋の箔のように、たまゆらの世の風にも切れとびそうに細くも、しかししづかなしつとりとした光を放つてきたその姿を想つて、いま私はしみじみと永田さんの半白の髪を見た。

x

x

x

x

x

x

x

# 彼岸つれづれ

竹 中 信 常

ははこつむ彌生の月になりぬれば

ひらけぬらしなわが宿の桃

曾丹集

三月は「やよい」、花月、花見月、櫻月、漢名「桃緑」が物語るように、桃の花の月であり、櫻の花の月である。やよいは彌生、いやすますおいしげる月、一切の草木の芽ぐみ、育ち、花を持つ月。

三日には、桃の節供に、「ひな」を飾つて、菱餅を供えほのかな春の訪れをたたえ、浅春の喜びに、冬の重苦しい気分をはらい去る。

新年、正月が暦の上の移り目、變り目であつたのとは異り、春の桃の節句は、春夏秋冬の季節の代り目として、實際上に、自然の姿にもはげしい變化が見られる。而もその變り方が、「生」えの方向であり、「明」えの轉換であることが、この上もなく人の心を浮き立たす。英語のスプリングが、「彈ねる」という動詞であるのもこのことを物語る。それ故、中國の禮記月令には、死刑の執行は、萬物の枯死する秋冬に限られ、日本の獄令もまた「立春より秋分に至るまで死刑を奏決することを得ず」と定め、萬物新生の春のよろこびを、死に行く犯罪人の上にまで反映させてゐる。

舊暦と新暦とのズレから、古書に見る彌生三月と今日吾々の知る三月の風物とは、若干のくいちがいが出來てゐる。その中で、これだけは昔も今も、一寸も變らぬのは、「彼岸」である。

春秋二回の彼岸も、花と共に、陽光の中ですから春の彼岸にこそ、人生の生き甲斐が感じられる。

「暑さ寒さも彼岸まで」

の俗諺は、季節の感じをよく現はしてゐるが、

「あつたら彼岸 ただ七日

なくともいい土用あ 十八日」

といった、昔の乞食の言葉にも、鋭い春の感情が浸み出てゐる。全く、彼岸は「あつたら」であり、すぎ去るのの惜しいほど好ましいものである。

ところで、座頭暦——文字をよむことの出來ない「文盲」のためには、繪でもつて畫いた暦、昔よく使われたもの——の彼岸のところには、どんぶりと重箱に、それぞれ團子と牡丹餅を山盛りにした繪がかいてある。彼岸だんごとおはぎである。

年末に正月の餅をつき、寒中に寒もちをつき、桃の節供には菱餅と、餅でつくつたアラレをたべる。そして彼岸には、牡丹餅とだんご。本當に日本人ほど、おもちの好きな、何かにつけておもちを使う國民はいない。——もつとも、餅そのものが日本以外には餘り見られぬが。とに角、嬉しいにつけ、悲しいにつけて餅をついてたべる。ここで少々おはぎと牡丹餅について講釋する。おはぎは「もち米」を全然搗かず、固くにぎつてあんこにくるむ。牡丹餅は、半搗きにしてあんをかける。おはぎの名は、くいかけた處が「はぎ」

の花に似てゐるからであり、牡丹餅は牡丹の花に似てゐるところからつけられたといわれてゐる。

彼岸詣りに寺へ持参するお供へは、おはぎか牡丹餅、或はこれを都會風に趣向をかえた「お稻荷さん」又は「おきつねさん」にきまつてゐた。牡丹餅の甘たるさに倦きた手が、油あげに包まれた、一握りの御飯の素直はな味に引かれる経験は、誰にもあつたことと思ふ。又、同じ牡丹餅でも、信州の埴科郡では彼岸の中日に、一釜飯を炊いてこれで作る。釜を分けたり、合せたりしない。又房州の富津では、彼岸中に家の誰かの命日に當る時は、ヤエニアタルト八重に當るといつて、二重の佛事を意味し、牡丹餅を作つて近所へ配つてたべて貰ふ。

寺参りは、葬式、年回、命日の外には、盆・暮・兩彼岸とされてゐる。季節の上からも大體、盆・夏・暮・冬、彼岸・春秋というふうになく配當されてゐるが、農村を主な地盤に持つてゐた日本佛教としては、農事とのふりあいからもうまく配分されてゐる。特に春の彼岸は、一年の農事のはじまる時を示し、彼岸を境にして、「雪の坊様」が歸つて「農神様」がやつて来る（青森縣・三戸郡地方）といわれるように、田打ち、種まきが行われる。このように、農事はじめのひとときを、先祖の墓参りと休養にすごす事は頗る合理的なこと、熊本縣の阿蘇地方では「ヒガンゴモリ」とて、佛様にお茶をあげ、阿蘇山に登つて一日を楽しむ。「ヒムカエヒオクリ」というのは播磨の東部地方の行事で、彼岸の中日に一日休んで、午前中は日迎へとて東に向い、午後は日送りとして西に向つて歩く、風習がある。丹後には、同様のことを「ヒノトモ」といい日の供をして、

朝は東、晝は南、午後は西とそれぞれの方角にある社寺堂廟を巡拜する風習がある。このように、農と結びついて太陽を尊崇すると共に、秋田縣の北秋田郡及び鹿角郡に行われる「マトガ」や「オホチナオホバナ」の行事のように、彼岸の入りの日と中日と結願即ち終りの日の夜、三度、丘や先祖の墓地で、大火を焚いて

おほちな、おほばな

明りに來たらいい

（爺よ、婆よ、此火の明るいのを見に來よ）と唱えて、亡き人々のためのなぐさめとするのは、佛教的な祖先への關心とでもいうべきであらう。

さてそこで「彼岸」とはと、ひらきなおるまでもなく、彼岸即ち極樂に到る時とて、大同年間（一二三〇年前）より我國に行われた佛教の年中行事の一つである。彼岸という名稱の由來は、梵語の波羅蜜多の譯、到彼岸にあることは弘くいわれてゐるところである。ところが、寛政十二年（一三六年前）に出版された「年中故事」という書物で、その作者玉田永教が神道のこりかたまり屋なるところから、口をきわめて彼岸の佛教起源を非難してゐる。

「日岸は大切に神を祭るべきの時なるに、彼岸功德經、或は天上驗記などという偽作の妖妄なる書を著して、日岸に功德すれば、彼岸へ佛達が船を用意し、三途川を迎いに來るの、又待つてゐるのと云ならして、佛事をなすの時とす、曆に有る大切の日岸を、いかんぞ佛事とするや」

とふん慨してゐる。無論、彼岸功德成就經、速出生死到彼岸經、彼岸齋法成道經、龍樹菩薩造天驗正記等は、偽作の經典である。然し大切なことは、彼岸が經典に書いてあるなしというのではない。日

本古來の農事上のしきたり、即ち春分、秋分に際して行われるいろいろな行事が、佛教の中にとり入れられて、彼岸のならわしとして今日にまで傳つたということが大切なのである。元來、ならわし仕來りといったものは、これこれの理由だからこうしなければならぬ、といった理結めの上に行われるものでわなく、いつとしもなく大勢の人々の歸せずして一致した氣持や意見が段々に形をととのえて、出來上るものなのである。それだから、彼岸も、佛典に到彼岸とあるからだとか、觀經の日想觀によるものだとするのは、むしろ本末顛倒であつて、此點では玉田永教氏のいう通りである。ただ、わたしたちが注目したいのは、たとえその大元は、單なる曆の上での年の半分ということであつたにせよ、これをうまくとらえ、農事の繁閑とにらみ合せて、佛心のない人々に少しでも菩提心を起こさせるようにしむけて來た、われわれの先輩たる昔の佛教者の永い年月をかけての努力についてである。

最近、ものごとの起源をたづねて、もとはこうだつたが、とか、本當はこうだつたのだが、とかいつて、そのもとがすべて神道にあることを誇ると共に、それを色々にゆがめまげてしまつたのを佛教の責任だときめこむことが流行してゐるようだが、變化ということがすべて惡化ということになるわけではなし、起源が必ず正しくて末流がすべて間違つてゐるにも限らぬ。むしろ、その變化の様相を忠實にたどつて、そこに作用してゐる佛教の力、信仰をして大衆化した生きた佛教の姿を、正しく理解し、評價すべきだと思ふ。

彼岸に、つれづれに舟漕いでゐたらとんだ所に舟がついてしまつたが、このことについては、未だ未だ、來月の四月八日の花祭、七月十三日の魂祭りなど、お楽しみは當分つきないようである。

## 煩悩と細菌

無明は心理學的に見ると無意識本能の總體で煩悩は本能の發現である。本能に種々あることは人も知る如くで、すべての本能が悪いと云ふのでは無く、それは細菌の中に良否あると同じである。然し迷つて居る吾々には本能がすべて惡用されていることも事實である。従つて解脱の爲めにこの本能を全部殺してしまおうと云ふのが出家主義の小乗のやり方である。恰も煮沸して細菌をすべて殺してしまふ様なものだ。大乘の行き方には色々あるが、行によつて煮沸殺菌をやつて覺種と云う高等菌を植えて、甘酒の様な人間を作らうとする初期大乘もあれば、始めから煮沸を行はないで「信」と云ふ特種藥で、一度に善惡の本能を擧げて高等菌にしてしまふと云ふものもある。然し菌には生命があることを忘れてはならない。不斷の注意と搔廻しが必要である。これが「信」にともなう「行」である。さて淨土宗はこのなか何にあたるか。うまい甘酒を飲みながら念佛の妙行人を考へるのもよからう。(松濤誠廉)

花まつりプレゼント

## 釋尊繪物語

四六版十六頁繪人  
オフセット四色表

一部二〇圓(送共)、百部以上實費、千部以上貴名刷込

求道研究の好指針

推尾辨匡  
大僧正述

## 無上道を志して

一部三十圓

申込所

大阪吹田局旭丘共生近畿總局

# 生きることの教育

野 口

彰

## 一

先日、或る新制中學校長を訪ねたとき、談  
たまたまお互に懷いている教育信條のことに  
ふれて、その校長がいわれるには  
「自分は生徒に、本當に生きるということの  
意味をわからせようとしている。」

とのことであつた。洋々たる前途をもち、  
春秋に富む彼等青少年はおそらく生とか死と  
かの問題などは、現實の問題としては夢想だ  
にもしないで毎日、毎夜を過ごして居ること  
であろう。従つて生きるということの意味な  
ど考えて見たこともないであろう。しかし一  
歩退いて、自分の身の廻りをふりかえつて見  
ただけでも、親戚、學友、知人の中に、若く  
してはかなくなつてしまつたものを數えるこ  
とは必ずしも困難ではない、

昨今の交通事情を考えると、一日の勤めが  
終つて無事歸宅することができたことさえ有  
難いことであつて、「あゝ今日も幸いにして生  
きて來た。」と胸をなで下ろすことが少なくな

いのである、

私の年來の習慣として、一日の仕事が終つ  
て寢につく前に、枕邊に正坐して「今日も一  
日無事に過ごすことができて有難うござ  
います。明日もまた早く起きて元氣で働かせ  
て下さい。」と心の中に唱えて床に入る。それ  
は神様か、佛様か、わからないが、要するに  
人間以上のお方で、常に人間を見守つて下さ  
つているお方に向つて挨拶するのである。

何心なく、毎日毎夜を過ごしているのでは  
あるけれども、考えて見れば容易なことではな  
い。それを生きて行くということは實にすば  
らしいことだと思ふ。そう思うと、たとい一  
日でも生きて行くということについては、全  
力をつくして、生の充實をはかり、悔いの殘  
らないようにしなければならぬ。

こんな考えから、前記の某新制中學校長は  
生徒に「本當に生きることに」の意味を掘り下  
げてわからせようとしているものと思ふ。ル  
ソーのエミールに「幼きものが、いつ神に召

されても、少しも悔いの残らないような生活  
をさせなければならぬ。」という一節があ  
る。全くその通りだと思ふ。そして本當に生  
きることの意味を掘り下げて來ると、必ず、  
人間以上の何ものかにふれて來ざるを得ない  
と思ふのである。

## 二

教育に従ふものとして幼きものに、ことに  
第二の誕生といわれる青年前期の少年達に對  
して、心から念願することは、「彼等のこれか  
らの生涯を、どうぞ純潔なものとして送つて  
もらいたい」ということである。

何も知らない彼等は、つい、うかうかと惡  
に染まりたがるものである。新制中學の時代  
がちやうどその時期にあたるのだ。社會惡か  
ら、何も知らぬ彼等を護るということは、實  
に容易ならぬことである。

山本有三の「波」にあるような、自然の力  
が不可抗力の波となつて生命の中に漂つてい  
るのかも知れない。人性の深い因縁から來る  
「業」なのかも知れない。つくづく我が無力  
をかこつことがある。ショーペンハウエルは  
「教育によつて人の性格を變えようとするの  
は、鉛を變じて黄金となし、あんずの木にリ  
んごをならせようとするに等しい。」といつて

いるが、或はそうかも知れないと思う。

「だつて先生！ 私だけではありません。ほかにも澤山やつているのがありますよ。」  
 というように、自分だけ正直にしていたら馬鹿を見る、という考えが彼等を支配している。戦争を放棄して眞に文化國家として立つべき日本の青少年が、純潔の生涯が保てないで果してどうなるものであろうか。

「他人がやるからこそ、せめて自分だけでもあえてそれをやらないのだ。」とか、或はまた「他人が少しもそれをやつてくれないからこそ、せめて自分だけでもそれをやるのだ」という、消極、積極の「義」を守り通そうとすることは、大人でも非常に困難なことではある。

こうした困難な問題にぶつかつて見ると、やはりわれわれが頼りとするものは人間以上の存在である。

「他人が何といおうと、常に自分をどこからか見まもつて下さつているお方がある筈だから」という安心感を以て、勇んで事にあたるといふのでなければ、この混沌たる社會惡とたたかつて純潔の生涯をたもつことはほとんど至難のことであろうと思う。ここにも宗教教育の必要がある。(愛宕中學校長)

## 正しい生活

吉原元明

今の世相は親子心中、夫婦喧嘩、ギャング空巢ねらい、ありと凡ゆるみにくい行動が、恐れもなく公公然として白晝行はれております。然し一面には御承知の通り人心の動向は何か大きなものをつかみたいと云ふ、求道精神のあることもいふない事実であります。

過日大學卒業して、新に會社に勤務された方に御目にかかり、就職の感想をたたきました。すると、御本人の話しでは學生時代が一番楽しかつたです。社會に出て見ると餘りに裏面が暗くこんな世の中として見ると人生は苦しみであり人間に生まれた甲斐がない。どうも仕事を眞面目に働くことに熱が出ないといふ色々悲觀的な話しがありました。折角理想を持つた學生に、こんなはずみのない氣持をもたすことは實に社會の罪であり、先輩の罪でもあります。段々學徒の精神が歪められてくることは平和日本建設の途上にある我國としては、國を憂ふる私共にとつて大に三省せねばなりません。

昨年再來されたヘレンケラ女史は、三重苦を持つ氣の毒な身の上であります。しかし私は幸福な女史と申したい。三重苦を持ちながら世界中の哀れな人々に慈悲博愛の手をのばさるるのは何を私共に教へているでせうか。人間の幸福は宗教に生きる事ではないでせうか。

私共が人間に生まれた事は何と云つても悦ばしい事です。それは正しい批判と眞の自由との特權がある爲めでせう。佛格を得た人は宗教に豊かな方でありますが、此の批判と自由の智力に由つてぐんぐん、智慧を磨きたてた人格者であります。人間の天分を高い價值生活に認め之を實現した人であります。私共はいろいろの權利を云々する前に、人間の天分がどの點にあるや、本質的問題に觸れるのが正しい生きかたではないでせうか。此の根本に立てば其處には正しい見方正しい考へ方が起ると思ひます。佛心者大慈悲是也の大きな敬愛の精神に立つ事が、よろづ問題の大事な鍵であります。

今日の人間は、人間の尊とさを忘れ、自ら自分の價值をさげ、之れを恥辱とも思はないものであります。佛教は、人間の本質を尊び之れを磨きあらはす處に凡ての息吹きが生まれる事を教えてゐます。

# 説きがたきもの

——淨土教の本質・第三講——

眞 野 正 順

佛教とは何であらうか。云ふまでもない。釋尊の偉大なる成佛の體驗事實の内容を開顯せられたものである。佛陀は決して單なる理論を説きに來た哲人ではなかつた。佛陀は自ら人生の苦惱を離脱せんとして苦悶して道を求め、ついにその現實體驗において完全に解脱し輝く永遠の喜びに達せられた。この偉大なる體驗を全人類にわかち與へ、その喜びを永久に共にせんとせられた。そして現れ來つたのが佛教である。したがつて、この成佛の體驗事實こそ佛教の基本である。その内容開顯のためにのみ種々なる釋尊の教訓や理説が現はれて來たのである。

それならば、この尊き成佛の絶對的體驗の内容は果してよく教説によつて他に傳え得たであらうか。曠世の偉人、釋尊の偉大なる力能を疑ふものは無い。然しながら、その事がきわめて困難であつたことは、直ちに豫想せられるところである。さきに述べた體驗と理論との超ゆべからざる

間隙が冷然としてそこに口を開いてゐるからである。

われ／＼は、こゝに古經典が例外なく筆をそろへて、この困難を説述するに力を盡してゐるのに注目するのである。

(一)　すでに正覺に達し佛陀となられた釋尊は、この體驗が深刻にして特異なるものだけ、これを他に傳へるに非常なる困難を感じ果してこれが説示され得るものか、懷疑的となり、深い躊躇と懊惱とに陥られる。

(二)　そこに惡魔の誘惑がくる。魔は釋尊の躊躇につけ入つてその耳に囁いて、その體驗は傳達することは不可能だから、獨りこれを懷いて死んでゆくのが當然であると説く。釋尊も次第にその氣になる。

(三)　これを見て、諸天善神は愕いてこもごも天上から降り來つて必死となつて釋尊に説法を懇請する。釋尊はふたゝび懊惱をはじめる。

(四)　釋尊は遂に人類の永遠の幸福のためにこの一説き

がたきものを敢て説かんと決意せられるが、その開示の道を見出し得ず、ふたゝび深い瞑想のなかに沈んでしまふ。そして一七日の間、一心にその構想に努力せられる。

この説話的叙述には恐らく若干の後世的修飾を含むであらう。しかし、それにも係らず、この中に體驗の偽らざる實相が現はれておるのを否定する事は出来ないであらう。おそらく釋尊自らの追憶的告白に基くに相違ない。

かくして遂に説法は開始せられたが、驚くべき事は、それが極めて理知的に徹底せることであつた。

一般に、宗教においては、其體驗は理知と相隔つておるところから、その表出に理性を遠ざけて感情的または神話的な手段がとられるのは致し方ない事であつた。然し、それによつて朦朧たる神祕的なものとなり迷信に近づいてゆくもまた止むを得ぬ所であつた。

然るに、佛陀はその強靱なる理知を揮つてこの越えがたき障壁を突破するを敢てせられた。すなわち、なんら、神祕架空的なものによらず、徹底せる現實洞察によつて、常凡なる假相を破碎して、そこにおのずから、生々たる緣起一如の世界を躍出せしめ、かゝる永遠なる世界の上にゆるぎなく一切の現實を位置せしめたのである。かくて、世界宗教史上たえてその匹儔なき偉大な理性的宗教が成立したのである。

然しこれによつて遂に體驗と理論のギャップは超へられ

成佛體驗の内容はよく傳へられたであらうか。

きわめて卑近な事柄であつても、體驗の境地を語る言葉は、それと同じ體驗を経た者でなければ、本當には理解されぬとせられる。その體驗を全く缺いた者に向つて、言葉だけでそれを理解させることは不可能である。佛陀の教説も、その體驗に立つ佛陀よりすれば完全な表現であつたに相違ない。然しながら、その體驗なき弟子等よりすれば事情は異なる。それを理解するに彼等自らの境地においてする外はない。所詮、人はたゞわが體驗の深さに従つてすべてを理解するにすぎぬ。理解さす事のできないのは説き手の罪ではない。聽き手の不完全さの故である。

偉大なる佛陀の教説もこの鐵則から脱する事はできなかつた。佛弟子等は師の教説に従つて眞剣に努力し、それぞれ尊い所獲があつたには相違ないが、悲しい哉、それは佛陀の在したまふ處の眞の境地ではなかつた。即ち教説によつて到達しえた宗教的生活と、釋釋それ自らの宗教的生活とは違つてゐたのである。

この事實を示すものは甚だ多い。いまはたゞ次の一つだけ指摘しておこう。

知らるゝ如く、原始佛教においては、佛陀の教にしたがい、その理想に到達せる者は一羅漢一とよばれる。即ち教説による理想體現者であつて釋尊と全く等しいものとせられる。古經典に、最初の佛弟子五比丘が悟に達したとき、

こゝに六羅漢ができたと記しておる。五比丘に釋尊を加へたものであつて、釋尊もまた羅漢に外ならぬ事を示したものである。これ、萬人は悉く佛陀となり得るといふ平等の主張から極めて當然な歸結であつた。

しかるに訝しむべき事には、他方において佛典は決してこの事を承認してゐないのである。即ち、釋尊は「佛陀」として、諸弟子羅漢等から遠く超え出でた人格とされておる。この事は、原始經典阿含のほとんど全部を通じて見らるゝ特長である。

これは、どう理解したらよいのであらう。もしこれが他の宗たとへば基督教のやうなものがあつたなら、別に怪むに足らないであらう。彼等の教祖は、はじめから、天から下つてきた神子とせられ、人とは異なる超異的なものとせられ、そう云ふ超異的なものであればこそ其教も尊いと信ぜられておる。

しかし、佛教においては人類は互に平等である。人はすべて釋尊と同じく佛陀となり得るといふのがその無比の特長である。もし、及びがたき優越が釋尊にのみ存するとするならば、佛教は自己の主張を裏切るものとせねばならぬ。然るに、それにも係らず、古經典は及びがたき釋尊の優越的人格を語つてやまぬは何故であらうか。

簡単に云へば、佛弟子羅漢に實現せられた宗教生活と釋尊の圓滿なる宗教生活とを比較すると蔽ふべからざる差異

が、そこに存するからである。いかに理論は等同であると云つても、この事實はどうにもならない。一方はいかにも消極的で他方は溢るゝばかり積極的である。この理論で解決できぬ不満が次第に佛陀を弟子羅漢から引離れたものとせずには居られなくなつたのである。

それ故これは言葉を換へれば、教説を通じてとらへたものと、釋尊における本來のものとの差異である。具體的には、教説及びその直接の結果に對する不満である。もつと突込んで云へば、教説は完全に體驗を現はさなかつたといふ反證である。

この「佛陀は其教説よりも超え出でゝおる」といふ反省。これがそもゝ／＼大乘佛教—わけて淨土教の興つてくる發端である。

しかし、夫れにしても、大聖釋尊はこの事に氣が附かれなかつたのであらうか。その様な事はない。さらば如何に補はれたか。その事とまた淨土教は深く關係するのである。

## 四月號

ギリシヤ人と念佛

早春の大佛

中村 元

吉田 絃二郎

星野 立子

大野 法道

## 芝園だより

◇水ぬるむ小川には小魚の影が動き、街の花屋にはフリジャ、ヒヤシンスと、春の花が飾られる。また廻り来る春、淡雪の消えゆく如き人の世の想い、いつも吉田紋二郎先生の隨筆は私たちの心に沁みる。先生の本誌に寄せて下さる御心を讀者の方々と共に感謝したい

◇文壇著名の作家吉屋信子氏から隨想を頂けたことは本誌春の歩みに限りない喜びです。安住の彼岸を求めて止まないほのかなる想いを味讀されたい。吉屋さんの隨筆に現はれる鎌倉の佐藤夫人は近作の佳句を寄せて下さった。春の詩の鳥居氏も鎌倉の住人、正大英文學出身の詩人です。

◇眞野先生の講義第三回、一步一步、淨土への信仰の深まりに導いて下さいます。毎月佛教習俗を中心に興味ふかい、つれづれ執筆の竹中信常君は本誌同人、正大助教授として宗教學の新進。こんど同

人の藤田、中村康隆氏とともに、「佛教習俗の研究」で文部省人文科學補助を受け、佛教民俗學の新分野を拓くため努力していることを御紹介しておく。(藤田)

◎いま、確かに生きることが失決の問題だ。ともかく食ふことだ！これがいら立たしいチマダの聲である。たしかにそれも眞剣なことではある。

しかし、つい最近、肺患で死んで行つた或る青年の、いまはのきわの靜かな告白は、もつともつと眞剣だつた。刻一刻、死の淵に追ひやられる斷末に臨んで、

「ぼくは今、死を體驗しています。あなたは、こうしてゐるぼくを、至極靜穩だと思はれるでせう。いゝえぼくは今寸暇も惜しいのです。早く眞實生きて來たのだと云ふ満足が得たいのです。むろん金や食ひ物ではありません。たゞ、お前の生前の一切は、わたしが知つてゐる、安心して逝き給へ、と云う救済者がありうると信じたい

のです。だが、このきはに到つてまだ半信半疑、ぼくは全く多忙なんです。」

場合はちがう。しかし生きようと云ふ點は同じだ。果して、いずれの場合が、より眞實な生き方だらうか。(吉田)

### 日本佛教文化協會編

#### 「いのち」と信仰

定價十五圓  
送料四圓

流行二大作家と熱血詩人がつづる信仰の叫び!!

(施本に最適)

「菊半蔵、二色刷表紙、二十四頁」

#### — 内容 —

「いのち」といふこと

尾崎一雄

阿彌陀様の話

佐藤春夫

生ける釋迦

藤田鶴夫

「梁塵秘抄」より

編輯部

#### 發行所

日本佛教文化協會

東京都港區芝公園二號地  
振替東京一八二二七番

## 「淨土」 三月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和廿四年二月二十日印刷  
昭和廿四年三月一日發行

(定價拾圓)

編輯兼  
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

配給元 東京都千代田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番  
會員番號B一〇八〇一四

會費 概算金百五十圓

(送料共)

# 佛教論叢第二輯

菊版一三〇頁  
一部一〇〇圓(送料八圓)

第二回宗學大會の研究成果を盛る待望の論集  
永らくお待たせしました。愈々出刊成る

## 主なる内容

選擇集の阿彌陀佛觀  
共同研究—佛身佛土論  
文博 山本 空外

小澤勇貫 藤原了然 田中順照 佐藤密雄

各山歷代爾書の研究  
鈴木 靈眞

稱名念佛の特色  
石井 教道

念の意義  
文博 山口 察常

淨土教は大乗佛教の傍流か  
文博 大野 法道

華嚴經の時間論  
佐藤 賢順

起請文に現はれた中世信仰  
藤原 弘道

宗教團體の紐帶  
三枝樹正道

その他三十餘氏の筆陣堂々の展開をみよ!

申込所 東京都港區芝公園五の一〇

淨土宗教學院研究所

振替東京五九〇一九番

# 佛教論叢第一輯

菊版一二〇頁  
一部八〇圓(送料八圓)

混迷の戦後教學界にいち早く多大の反響をよ  
び起した宗門教學の最高筆陣、第二輯とともに  
併せ讀まれたし。殘部僅少につき至急申込

## 主なる内容

淨佛國土論と淨土教  
文博 望月 信亨

淨佛國土思想の共同研究  
文博 大野 法道

江藤 澄賢 千賀 眞順 香月 乘光

藤田 寛雅 佐藤 賢順

念佛の種々相  
藤原 了然

厭欣思想の研究  
阿川 貫達

著那數の十二因縁類型  
松崎 誠庵

佛教に於ける人間のあり方  
佐藤 良智

他廿數氏の論說集録

申込所 東京都港區芝公園五ノ一〇

淨土宗教學院研究所

振替東京五九〇一九番